アルテス
ARTES

DIGITAL MONTHLY MAGAZINE
FOR MUSIC AND CULTURE

DEC. 2013

石田昌隆
大石始
大谷能生
小野幸恵
片山杜秀
金子智太郎
サラーム海上
鈴木治行
濱田芳通
久元祐子
広瀬大介
細川周平
宮田茂樹
村井康司
矢澤孝樹
安田寛
山崎浩太郎
山崎春美
輪島裕介
和田博巳

ジャンル無用の音楽言論誌！

ARTES

●このファイルについて

本誌は『アルテス』電子版のPDFファイルです。
iphone、iPadでの購読に便利なEPUBファイルも
配信しますので、合わせてご利用ください。
本誌の購読方法、読み方など詳細については本誌サイト
「購読のご案内」をご覧ください。
http://www.artespublishing.com/dbook_artes/

ロゴ・デザイン：宮一紀
表紙イラストレーション：へびつかい
表紙デザイン：折田烈（餅屋デザイン）

ジャンル無用の音楽言論誌！

アルテス

DEC. 2013

CONTENTS

005 **山崎浩太郎**／ 帝都クラシック探訪——音楽都市TOKYOを歩く
③陸軍とレコードの街、渋谷（下） **ゲスト／片山杜秀**

021 **サラーム海上**／ ボリウッド新世紀——サラームのインド映画＆音楽紀行
②サウンドも映像も最先端をいく大ヒット作『家族の四季』(2001)

032 **矢澤孝樹×広瀬大介**／話せばわかる！クラシック——ヤザワ×ヒロセの「超入門」講座
②「クラシック音楽」ってどういうもの？（下）

049 **片山杜秀**／片山杜秀の“昭和日記”
③電電公社がNTTに、専売公社がJTになったころ

061 **宮田茂樹**／ジョアン・ジルベルト〜ザ・ボサ・ノヴァ
③小野リサ、エレンコを経てミウシャへ

070 **安田寛**／音痴と日本文化
②文明の衝突と女宣教師

079 **和田博巳**／オーディオは音楽、音楽はオーディオ
②デジタル・リマスター盤、買うべきか買わざるべきか

085 **細川周平**／日々是好音——細川周平の音楽時評
②セシル・テイラーと田中泯——気の合う二人

093 **大石始**／まつりの島 La isla de carnaval
⑦ミニマル・ファンクに揺れる東北のゴースト・ダンス——秋田県羽後町の西馬音内盆踊り

106 **村井康司**／アルテス著者エッセイ 今のジャズ・ギターを準備した偉人
——ジム・ホール追悼

110 **大谷能生**／ブック・レビュー [和書]
細馬宏通著『ミッキーはなぜ口笛を吹くのか　アニメーションの表現史』
①魔法的な一瞬の驚きを発明するということ

114 **金子智太郎**／ブック・レビュー [洋書]
Robert Scotto, *Moondog: The Viking of 6th Avenue.*
②視覚障害とサウンドスケープ

119 **久元祐子**／アルテス著者エッセイ 体の声を聴く、楽器の響きを聴く

122 **輪島裕介**／カタコト歌謡の近代
⑥「モシモシアノネ」と「カム・カム・エブリボディ」から始まる戦後

130 **石田昌隆**／音のある遠景
⑥「アルタン祭り」とソウル・フラワー・ユニオン

141 **濱田芳通**／歌の心を究むべし
②歌は音楽? それとも言葉?――モンテヴェルディのレチタール・カンタンド

145 **鈴木治行**／イマジナリア
⑥サイレント映画の音楽(その2)

150 **山崎春美**／ロッカウェイビーチ⑥

153 **小野幸恵**／和の変容
⑤きらめく和紙「江戸からかみ」のある暮らし

162 編集後記

164 奥付

ジャンル無用の音楽言論誌!
アルテス
DEC. 2013
CONTENTS

帝都クラシック探訪
―― 音楽都市TOKYOを歩く

第３回　陸軍とレコードの街、渋谷（下）

文●山崎浩太郎　ゲスト●片山杜秀

―――クラシック音楽の演奏史を生き生きと伝える音楽史譚家・山崎浩太郎氏が、ゲストといっしょに、東京の音楽生活を彩ってきた数々の音楽ホールやレコード店などを、その土地の歴史とともに紹介します。評論家で政治思想史研究者の片山杜秀さんと歩く「軍都・渋谷」の最終回。

［2013年2月20日／取材・写真・構成：編集部／イラスト・地図：せとらデザイン］

ボリウッド新世紀
――サラームのインド映画＆音楽紀行

第２回　サウンドも映像も最先端をいく大ヒット作『家族の四季』(2001)

文●サラーム海上

――今や世界を席巻している“ボリウッド”産の映画と、古典から最新のサウンドまでインド音楽、どちらもよく知る“エキゾライター”サラーム海上さんに、めくるめくボリウッド映画とその音楽を案内してもらうこの連載。第２回は、南インドのチェンナイで出会った大ヒット作『家族の四季』をたっぷり語ります。

※「ボリウッド映画」は、インド最大の都市ムンバイを拠点に作られるヒンディー語の映画のこと。20を超える言語で年間総数約1600本もの映画が作られる世界一の映画大国インドにおいて、もっともメジャーな全国区の映画である。ムンバイの旧名「ボンベイ」と映画の都「ハリウッド」をもじってこう呼ばれる。

ボリウッド映画を「掘り」にチェンナイへ

前号からの続きだ。2001年秋、ボリウッド映画『ディル・セ　心から』の音楽と映像の絶妙すぎるシンクロを知ってしまった僕は、日本のビデオレンタル店に置かれていた10本足らずのインド～ボリウッド映画のセレクションをすぐに見つくしてしまった。さらに掘るためにはインドに行くしかない。

でもインドのどこに行く？　それまで僕はデリー、ヴァラナシ、ゴア、ムンバイをバックパック旅行で訪れていた。どうせなら行ったことがない場所がいい。古典音楽のコンサートをたっぷり聴けたらなおうれしい。

ヤザワ×ヒロセの「超入門」講座
話せばわかる！クラシック

第２回　「クラシック音楽」ってどういうもの？（下）

文●矢澤孝樹×広瀬大介

———昨年３月から今年１月まで山梨英和大学メイプルカレッジにておこなわれた矢澤孝樹さんと広瀬大介さんによる連続講義を誌上再現した「クラシック音楽史」入門講座。第２回もひきつづき、ふたりの対談形式で送ります。

泣く子も黙るソナタ形式

矢澤　でも、それまでの時代にも型がなかったわけではないでしょう？

広瀬　おそらくその前の時代——バロック、ルネサンス、中世とさかのぼっていっても、とうぜん、さまざまな型がありましたよね。音楽というのは時間の芸術といわれます。時間を切り取って、ある曲の時間が10分あるとしたら、その10分間はみんなで共有しないといけないわけですね。共有するからには、始めと終わりがわかっていないと、「この曲いつ始まって、いつ終わるんだろう」みたいになっちゃう。そうすると、こっちとしても安心して楽しめませんよね。この曲はこういう形でつくられていて、容れ物、つまり形式が決まっていて、こういう順番で展開しますよ、ということがあらかじめわかっていれば、その10分間はびっちり聴こうという集中力も生まれますよね。たぶん、それが容れ物が必要だった「意味」なんです。

その容れ物の形が、それ以前の時代になかったわけではない。中世、

片山杜秀の“昭和日記”

第3回　電電公社がNTTに、専売公社がJTになったころ

文●片山杜秀

前口上

昭和、昭和とおっしゃいますが、昭和といっても、長（なご）うございます。「懐かしき昭和」ってえのは、いつのことなんでございましょうか。世界大恐慌も、満洲事変も、国際連盟脱退も、日中戦争も、太平洋戦争も、原爆を投下されたのも、戦後復興も、高度経済成長も、公害列島と言われたのも、石油ショックも、原発をたくさん作るようになったのも、あれもこれも、みんな昭和。ほんとうにキリがございません。

そうでございます。昭和は64年までありました。丸山眞男と久野収の対談で、確か丸山眞男が、たとえば1930年代というのは1年1年、思想も政治も経済も社会も目まぐるしく変わるから、どの段階で世の中の現実に目覚めるかで、人間としての感じ方・考え方がかなり変わってくるんだと、喋っていたことがございます。つまり世代論では通用しない。10年20年単位ではなにも説明できない。1年刻みで、いやもしかすると月間・週間単位で時代のひだに入っていくくらいでないと、昭和の思想史はできないんだと。

そうなのか！　目から鱗（うろこ）が落ちましたね。世の中は1年ごとにぜんぜん違うんだ。日々刻々と違うんだ。そりゃそうだ。激動の近現代なのだもの。昨年まで思ってもみなかったことが起きているのが、いろんな分野であたりまえ。それを摑まえなくては時代は見えないのに、

ジョアン・ジルベルト〜ザ・ボサ・ノヴァ

第3回　小野リサ、エレンコを経てミウシャへ

文●**宮田茂樹**

———2003年、ついに日本にやってきたボサ・ノヴァの神様、ジョアン・ジルベルト。「奇跡」と謳われたその日本公演を実現させた立役者の一人が、RVCからMIDIレコードを経てディアハート・レーベルでプロデューサーとして活躍してきた宮田茂樹さんです。
めったに自室から外に出ない、人に会わない、といった不思議な行動が伝説化しているジョアンを、どうやって遠く日本にまで連れてきたのか？　この連載ではそこに至るまでの長い道のりを語っていただきます。
今回は大ボサ・ノヴァ・パーティーで知り合ったミウシャ宅を訪問。

ミウシャとベベウにエンコントロ

　目覚めるともう夕方の4時だった。ポケットに入っていたメモを見つけ、ミウシャに電話をしてみた。
「あら、シゲキなの。ベベウもいるから家に来たら」。
　ベベウって誰だっけ？
「じゃぁ、チョットだけお邪魔します」
　レブロン大通りに面した彼女の部屋は小ぎれいで居心地の良さそうなアパルトマンだった。天井までとどく本棚には葡英仏の学術書らしきものがびっしりと収められている。相当なインテリと見うけられる。
「彼女はベベウ。ジョアンとの間の娘なのよ、こちらはシゲキ・ミヤタ。

音痴と日本文化

第2回　文明の衝突と女宣教師

文●安田寛

———日本の音楽教育の歴史に、「音痴」という視点から新たな光を当てる連載。東書WEB「音楽専門館」における連載「音痴と日本人」（全14回完結。アルテスから単行本化予定）の続編にあたり、さらに壮大な“文明論”が展開されていきます。

「音楽の化身」とよばれた女宣教師

日本に来た宣教師は文明の衝突の体現者である。そして彼らは現場での観察者でもあった。音楽教育という現場においても、ひとりの女性宣教師が観察者として重要な証言を残している。

メーソンは、日本人に西洋音楽を教えることが可能だと信じていた。日本人は西洋の音階を習得することができ、それによって歌うことができるという確信。この確信によって、多くの日本人はそれまで体験したことのない「音痴」という厄介な劣等感に苛まれることになった。

メーソンの仕事は神格化され、日本に赴任した宣教師のあいだでなかば伝説となっていた。

> 「日本は西洋文化を無差別に受け入れることにしました。こうした時勢に日本人は、西洋の歌を教えるアメリカ人教師を呼び寄せました。こうしてボストンのルーサー・ホワイティング・メーソンは

オーディオは音楽、音楽はオーディオ

第2回　デジタル・リマスター盤、買うべきか買わざるべきか

文●和田博巳

———年季の入ったロック・ファンには、はっぴいえんどと並ぶ伝説的なロック・バンドとして知られるはちみつぱいのベーシスト、と言ったほうが通りがいいかもしれないが、いまもっとも信頼の篤いオーディオ評論家として、オーディオ誌や音楽誌で健筆をふるっている和田博巳さんを本誌連載陣にお迎えする。この連載では、ミュージシャンとしてプロデューサーとして、レコーディング現場での経験の豊富な和田さんに、録音・再生技術に着目した音楽やオーディオの楽しみ方を御指南いただこう。

マスタリングでほんとうに音が良くなるのか？

音楽ファンの皆さんは“リマスターCD”という言葉をご存じだろう。

レコード会社は、「デジタル・リマスターしたので音が良くなりました」と言って、かつての名盤を再発売していますね。モノによっては何度も再発売を繰り返している。これも皆さんよくご存じのとおり。

では、CDにおけるデジタル・リマスターとは、いったい何をやっているのか。おさらいという意味も含めて簡単に説明しておこう。すでに所有しているCDがリマスター盤として再発売されたとき、はたしてソレは買い直したほうがいいのか、それとも特に買う必要はないのか、けっこう気になるという人も少なくないと思うので。

日々是好音――細川周平の音楽時評

第2回　セシル・テイラーと田中泯――気の合う二人

文●細川周平

―――岡田暁生さんと交代で登場していただく細川周平さんの音楽時評。今月のテーマは、2013年11月に京都賞を受賞したセシル・テイラーです。ジャズの域を越え、ピアニストの領域を攪乱するセシルの、その受賞式でのダンサー、田中泯との共演を中心に。

未知の領域に挑戦する創造者としての「詩人」

今年（2013年）の京都賞思想・芸術部門（音楽）は、ジャズ・ピアニスト、セシル・テイラーに贈られた。これまでたいてい現代作曲家に渡されてきた部門としては異例で、賞の一般的印象を変えただろう。彼を推した審査員の一人としてこの結果は喜ばしく、稲盛財団関係者より授賞の受諾、来日の決定、日程などを知らされるたびに胸が躍った。実のところ、世俗的な名誉を受けるために長旅を敢行するかどうか不安があった。2012年にはブルーノート東京出演が直前にキャンセルされ、秋口にはヴィリザウ（スイス）とワシントンの公演中止の報が届いた。高齢（1929年生まれ）というだけでなく、気難しさ（完璧主義）もよく知られている。11月10日、授賞式の壇上で彼を発見した時には、それだけで笑みがこみあげてきた。

1973年5月、18歳の時、あまり予備知識なしに彼の演奏を東京厚生年金大ホールで聴いた。ジミー・ライオンズ（as）、アンドリュー・シ

まつりの島　La isla de carnaval

第7回　ミニマル・ファンクに揺れる東北のゴースト・ダンス
―――秋田県羽後町の西馬音内盆踊り

文●大石 始　写真●ケイコ・K・オオイシ

―――ハードコア・パンクのライヴでダイブし、ダンスホール・レゲエやドラムンベースのパーティーで踊り続けていた筆者は、2010年に体験した2つの夏祭りに自らのアイデンティティーを揺さぶられ、そこから日本のフォークロアを巡る旅に出かける――錦糸町河内音頭、高円寺阿波おどり、秩父夜祭り、五所川原の立佞武多、郡上踊り～白鳥踊りに続いて、今回は秋田県羽後町の西馬音内盆踊りを体験！

篝火を囲んで揺れる踊り手たち。右上に見えるのは囃子方が乗る櫓

今のジャズ・ギターを準備した偉人
――ジム・ホール追悼

『JAZZ 100の扉　チャーリー・パーカーから大友良英まで』

文●**村井康司**

―― 11月末に刊行した『JAZZ 100の扉 チャーリー・パーカーから大友良英まで』は、多彩で柔軟な視点からジャズという音楽の楽しさ、面白さを伝える最高の入門的なディスク・ガイドとして高い評価を得ています。その著者・村井康司さんに、先頃83歳で亡くなった名ジャズ・ギタリスト、ジム・ホールへの追悼文を寄稿していただきました。

村井康司『JAZZ 100の扉 チャーリー・パーカーから大友良英まで』(小社刊)

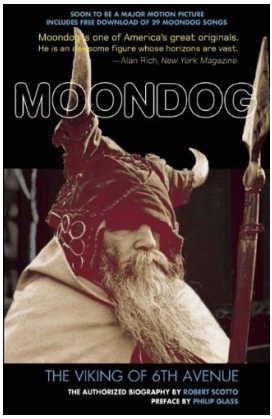
2013年12月10日、ジム・ホールが亡くなった。自宅のベッドで、眠るように安らかに。その穏やかで静かな去り際は、この偉大なギタリストの音楽そのものを象徴しているようにも思える。

一般的な音楽ファンにとって、ジム・ホールはどういうジャズ・ギタリストだと思われているのだろう。趣味のいい、そしてやや地味なギタリスト？　ソニー・ロリンズやアート・ファーマーを支えた名脇役？　それはまったく正しい。ホールの音楽性を一言で表現する言葉は「センスのよさ」であり、彼の的確でセンスフルなコード・ワークとリズム感覚は、バッキングにおいて最も光り輝くのだから。しかしホールの最も偉大なところは、その「センスのよさ」が、1950年代の段階で、その

Robert Scotto, *Moondog: The Viking of 6th Avenue.*

視覚障害とサウンドスケープ

文●**金子智太郎**



Proocess, 2013 [2007]

———新たにスタートした書評連載、大谷能生さんには日本語で書かれた本を、こちら洋書のほうは、美学と聴覚文化論を専門とする研究者・金子智太郎さんに選書とレビューをお任せしています。今月とりあげるのは、ニューヨークで活動した盲目の路上ミュージシャン「ムーンドッグ」の伝記です。

通名「ムーンドッグ」ことルイス・ハーディンは1940年代からおよそ30年間にわたりニューヨークの街角に立ち、自作の楽器を演奏し続けた。パーカッションを中心とする彼のスタイルはクラシック、ジャズだけでなく、北米先住民、ヒスパニック、日本などの音楽の影響が入り混じる、とてもオリジナルなものだ。彼の音楽は後にミニマル・ミュージックの先駆者となる若き作曲家たちに大きな影響をあたえた。実際、ムーンドッグは60年代にスティーブ・ライヒ、フィリップ・グラス、ジョン・ギブソンと4人でグループを組んでおり（その録音は出版社のサイトからダウンロードできる）、グラスの家に1年近く間借りしたこともあった。グラスは本書の序文で当時のエピソードを語っている。「彼は黒人やユダヤ人が好きでないと言っていた。私もユダヤ人かと聞かれ、そうだと答えた。そのとき、彼はなぜこんなことが起こるのか、なぜ最良の友人たちはみなユダヤ人

カタコト歌謡の近代

第6回　「モシモシアノネ」と「カム・カム・エブリボディ」から始まる戦後

文●輪島裕介

――「ウナギイヌ」たる「カタコト歌謡」こそが、じつは近代日本大衆歌謡の主流だった!?　そんな視点から日本歌謡史をたどり直す本連載、これまでバートン・クレーン、川畑文子、ディック・ミネ、トニー谷、ジェリー藤尾を俎上にのせてきた。前回（9月号）「レコード以前のカタコト歌謡」に続いて、今月は戦後占領期のカタコト歌謡に着目します。

モシモシアノネ、アノネ、アノネ、モシモシアノネ、アアソウデスカ

カム・カム・エブリボディ、ハウ・ドゥ・ユー・ドゥ・ハウ・アー・ユー、ウォンチュー・ハヴ・サム・キャンディ、ワン・アンド・ツー・アンド・スリー・フォー・ファイヴ

上の2つの文句が自然にメロディ付きで再生された読者はおそらく70歳オーバーだろう（研究者やよほどの好事家でなければ）。前者は「ロンドン橋落ちた」、後者は「証城寺の狸囃子」のカタコト版替え歌だ。

今回は、この2曲から大衆音楽における戦後占領について、ひいては戦後大衆音楽の「起源」について考える。通常名が挙がる〈リンゴの唄〉や〈東京ブギ〉や〈星の流れに〉ではなく、この2曲の「カタコト歌謡」

音のある遠景

第6回　「アルタン祭り」とソウル・フラワー・ユニオン

写真と文●石田昌隆

———「壁」が崩れる直前、1989年初頭のベルリンに始まり、パリ、キューバ、エルサレム〜ガザ地区、シリアと続いてきた、“音楽の発火点”を求める旅。連載第6回の舞台は98年の東京とダブリン。アルタンやドーナル・ラニーほか日本にやってきたアイルランド音楽界のトップ・ミュージシャンたちと日本勢との交流を追う。

1998.5.24　アルタンの紅一点、マレード・ニ・ウィニー。

歌の心を究むべし

第6回　歌は音楽？　それとも言葉？
――モンテヴェルディのレチタール・カンタンド

文●濱田芳通

―――楽譜が完全なスコアとして存在しない古楽の演奏は、音楽のあるべき姿をもとめる考古学であるだけでなく、アグレッシヴな創造的解釈と精神の飛躍が求められます。いまもっとも刺激的な古楽グループのひとつ「アントネッロ」を率いる濱田芳通さんが、みずからの「古楽の冒険」を生き生きと綴ります。

歌を変革したモンテヴェルディ

歌において「音」と「言葉」どちらが大事か？

難題である。「どっちも！」が正解であることに疑問の余地はない。しかし、あえて「どっちだ!?」を俎上に上げた議論は古くからあった。

今回は17世紀オペラ創成期のころを考えてみたい。

オペラが産声をあげたこのころは、「言葉」が優勢であったといえるだろう。オペラの開発者たちは音楽の中の言葉に、もっともっと市民権を与えるということに集中していたからだ。

そこで「レチタール・カンタンド（Recitar Cantando）」、つまり「歌いながら朗唱する」という様式が生まれた。この様式によって終始劇は進行する。レチタール・カンタンドは今日の「レチタティーヴォ」や「セッ

イマジナリア

第6回　サイレント映画の音楽（その2）

文●鈴木治行

———作曲家の鈴木治行さんが、自作の『語りもの』シリーズを例にとりながら、「音とイメージ」による表現のあり方を探ってきた本連載。第6回目となる今回も、サイレント映画ライヴを何度も手がけてきた鈴木さんならではの実践的な視点をふまえた考察が展開されている。

前回はサイレント映画につけられる音楽一般について書いたが、今回はそれを踏まえ、自分自身のサイレント映画へのアプローチについて考察してみる。まずはこれまでの僕のサイレント映画との関わり歴を簡潔に。ムルナウ『ノスフェラトゥ』（2000年12月、下北タウンホール）を皮切りに、エイゼンシュタイン『戦艦ポチョムキン』（2001年3月、調布グリーンホール）[*1]、ドライヤー『裁かるるジャンヌ』（2005年1月、パルテノン多摩）、ヴェルトフ『カメラを持った男』（2006年1月、パルテノン多摩）、成瀬巳喜男『限りなき舗道』（2011年2月、東京都写真美術館）、というのがこれまでに手がけた長編であった。短編では、キートン『文化生活一週間』やポーター『大列車強盗』、『アメリカ消防夫の生活』などもやったことがある。飯村隆彦氏とも4作コラボレートしているが、それらの作品は、サイレントとはいえ現存の作家との共同作業であり、ここでの主旨からは外れるので除外する。

最初に『ノスフェラトゥ』をやった時は今と違ってまだ電子音楽のライヴ演奏は行っていなかったのだが[*2]、演奏家を頼めないという予算的

ロッカウエイビーチ（6）

文●山崎春美

「まだ、まにあいます。あと、約1時間あります」

そう言うなり彼は、右腕に填めた腕時計をこちらの顔っ面めがけて、目の前にぐいっと、突き出した。

「ほれ、見ろよ」ということらしい。示された文字盤は、素朴でむしろ質素な人工皮革らしいベルト部とは、まるで違っていた。

目の潰れんばかりの輝かしさだけでは終わらない、美しい笑顔の中にひときわ抜きんでて目を引く白い歯のような！　真当な芯からしっかりと燃え立つ笑顔さながら！　天然物の真珠の持つ、美しくなめらかな、肌の色がそのまま生み出すような薄い桃の色、桃色。文字盤を見た瞬間に、心の真骨頂とも言うべき烈しささえ、かき立てられたのだ！

そうしておいて、どうだろう。

そのベルト部、バンドの暗い色は、彼の目の色に似ている。

最後に生き別れてから何十年も経って、行方不明者の捜索願いから失踪宣告の認定までされて、もはや戸籍もなければ身寄りは愚か、ただ一人の友人、たった一人の知り合いさえいない。

もっと言えば、その孤独、ひとりぼっちである。そいつを知っている者さえ誰もいない。その彼自身を除けば。

この広く、のっぺりと年月の平気で古びる世の中には、そんなヒトは実はたくさんいる。言葉数少ないが陰鬱な影が指す、その色味に滲んで消えずにいる「暗室」の黒カーテン、分厚くて隙間から漏れる光を熱を、あかりを塗りつぶさせる、黒とも闇ともつかないのに、光まわりだけは「殺せる」ライセンス、殺しの許可証の、凶状持ちの身分証明の、すべ

和の変容

第５回　きらめく和紙「江戸からかみ」のある暮らし

文･写真●小野幸恵

———「和」の潜在的な魅力と新たな可能性を追いながら、さまざまなアートシーンを紹介する「和の変容」。今回は、「江戸からかみ」の伝統を用いて開発されたステーショナリーや日用品にフォーカスし、現代に生きる伝統の素材と技をひもとく。（取材協力：株式会社東京松屋）

手漉き和紙に伝統的な唐紙の版木「根引きの松」を摺ったランチョンマットと箸袋

編集後記

記憶する意志について

最近、情報と記憶は違うものではないかと思うようになった。

ネットの情報には基本的に揮発性がない。つまり、新聞やラジオ、テレビの時代であれば、やはり最新のニュースがいちばんインパクトあるものとして受け取られ、時を経るにしたがってだんだんと記憶も薄れ、それとともに価値も低くなっていくものだった。対してネットの情報は、いったんアップされたら削除されるまではずっと同じようにそこに在り続けるので、誰かが検索してそれにヒットすると、あたかも「最新ニュース」のような顔をして再登場し、ときにはSNSでシェアされ、拡散する。流行りの言葉でいえば、情報のフラット化が時間的にも起こってきているのだ。

ニュースサイトやブログなどはその記事が公開された日付が明記されているので、よく読めば昔のニュースだと気づくわけだが、情報の入ってきかたが昔のように一方向的ではなく、あらゆる方面から不意に送り込まれてくるので、情報を「最新のもの」「ちょっと前のもの」「昔のもの」と脳内で差別化し価値付けすることじたいが、もはや意味をなさなくなってしまった。

おそらく、新聞やラジオ、テレビなどの「マスメディア」が登場したときにも——さらに遡れば印刷が発明されたときから——、情報の「時間的フラット化」は少しずつ促進されていったのだろう。人間の脳は自らの「記憶」の領域を、それらメディアに少しずつ明け渡していった。ただ、ネット革命以前には、人間はまだそれらメディアにたいしても「記憶」の流儀で対応しようとし、あるていどそれに成功していた。それがそろそろ対応不能になってきた、ということにすぎないのかもしれない。

これから、人間が「記憶」という流儀あるいは機能を捨て去る、あるいは喪う時代がやってくるのではないか、となかば本気で思っている。記憶という機能を捨て去った人間は、情報にたいして「その場その場で

適切に」対応しようとするだろう。記憶はコンピュータにまかせて、人間はコンピュータが記憶してくれた情報を参照しながら、その時々の最適解を出せばいい——これのどこが間違っているだろうか。

なかなか答えの出せないテーマだ。でもひとつだけ、「情報と記憶は違う」ということだけは確認しておきたい。コンピュータは情報を保存することはできる。でもその情報は記憶ではない。記憶とはひとつの「意志」であり、過去にたいする「責任」であり、それらすべてを含んで、生きるうえでのひとつの「態度」だと思うからだ。

日本がここ100年ほどの間に辿ってきた歴史の記憶さえも捨て去られようとしている時流のなかで、せめて自分ひとり分の記憶の置き場所だけは、心のなかに確保しておきたいと強く思う。［木村］

2013年に聴いた音楽と読んだ本

この1年なにを聴きなにを読んだのかすら、自力では思い出せなくなって久しい。iTunesのプレイリストとGoogleカレンダーと事務所と自宅の書棚を見直して選んだ2013年のベストはこんなラインナップになりました。もっと本を読まねば！（順不同・2012年以前の作品も含みます）［鈴木］

【CD】
アントニオ・ロウレイロ『So』
カニサレス『魂のストリング』
ソギー・チェリオス『1969』
キリンジ『Ten』
ソウル・フラワー・ユニオン『踊れ！踊らされる前に』
細野晴臣『Heavenly Music』
奥田民生『O.T. Come Home』
渋谷慶一郎『ATAK019 Soundtrack For Children Who Won't Die, Shusaku Arakawa』
渋谷慶一郎『ATAK020 THE END』

朝日美穂『ひつじ雲』

【ライヴ】
キリンジ（4/11）
ウィルコ（4/13）
THE END（5/23）
波多野睦美（6/18）
BOREDOMS presents 7×13 BOA DRUM（7/13 Free Dommune 2013）
トクマルシューゴ、salyu × salyu（8/11 ワールド・ハピネス2013）
アントニオ・ロウレイロ（8/29）
ソウル・フラワー・モノノケ・サミットwithチャラン・ポ・ランタン（1/24, 8/10）
松田美緒、つのだたかし他（9/19）
カニサレス（12/19）
Open Reel Ensemble、蓮沼執太フィル（12/21）

【本】
得地直美・本屋図鑑編集部『本屋図鑑』夏葉社
内沼晋太郎『本の逆襲』朝日出版社
佐々木敦『シチュエーションズ 「以後」をめぐって』文藝春秋
國分功一郎『来るべき民主主義』幻冬舎
白井聡『永続敗戦論』太田出版
光嶋裕介『建築武者修行』イースト・プレス
名越康文『自分を支える心の技法』医学書院
藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』角川書店
久松達央『キレイごとぬきの農業論』新潮社
小池昌代『ことば汁』中央公論新社
湯浅学『ボブ・ディラン　ロックの精霊』岩波書店。

アルテス

DEC. 2013

2013年12月28日　初版発行

Web	http://www.artespublishing.com/dbook_artes/
Twitter	https://twitter.com/artespublishing
Facebook	https://www.facebook.com/magazineartes

発行者	鈴木茂・木村元
発行・発売	(株)アルテスパブリッシング
	〒155-0032　東京都世田谷区代沢5-16-23-303
	http://www.artespublishing.com/

デザイン	折田烈(餅屋デザイン)　http://www.mochiya.nu/
表紙イラストレーション	へびつかい　http://hebi.soragoto.net/
ロゴ・デザイン	宮一紀
DTP	浜田淳
Web制作	小濱海代
編集協力	公魚(渡邊未帆、高橋智子)

ISBN978-4-903951-78-2

※本誌に関するお問合わせはウェブサイトのフォームよりお願いいたします。
http://www.artespublishing.com/dbook_artes/contacts.html

※本誌に掲載されている文章、写真、イラストレーションなどの著作権はそれぞれの著作者に帰属します。本誌の内容の引用あるいは複製、転載など著作権に関わる行為については現行の著作権法に従って行なってください。また、本誌のご紹介、ご批評は大歓迎ですが、転載をご希望の際は上記のお問合わせフォームから弊社までご連絡ください。

※本誌は原則として毎月１回配信します。